

ローマの信徒への手紙 5章 1-2

5:1 このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、

5:2 このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

1) 義と認められた

救いを得た。神の前にまっすぐ立てるようになり、神の心をそのままなづけるようになりました。神との関係を妨げる壁が取り去られ神との心の交流が自由になりました。そして神に対するわだかまりや恐れが取り去られたのです。救いがもたらされました。

2) 神との間に平和を得た

それまでは平和ではなく「不安」「恐れ」そして「混乱」が中心しかし、今や「神との間に「平和」「平安」がもたらされたのです。和解がそこにもたらされました。

神に知られることが「恐れ」ではなくなっただけで、神に語れることが「自由でうれしく、ありがたいこと」と感じられるようになりました。

最初の人、アダムは罪を犯した時、神から隠れました。足音を聞いただけで恐怖したのです。

しかし、その恐怖は取り除けられました。

神の臨在は平和であり、安心となりました。神が恐ろしい存在ではなく、むしろ安心をもたらす存在となりました。

3) 「恵み」に導き入れられた

常に「もったいないほどの善意」が追いかけてくるような状況の中を生きられるようにされました。

神様との関係を考える時、その関係は「愛による救い」と「慰めに満ちた平和」と「あふれるほどの、もったいないほどの神の善意」の中に導き入れられているのです。

「神のめぐみ」は、私たちの人生のあらゆる場面にすでに届いているのです。

私たちはそれに気付いていないだけなのかもしれません。

イエス様を信頼し、神との平和を得た、私たちの人生は、「神の恵み」に気づかされながらの人生を送れるのです。

神の恵みがここにもあり、あそこにもありましたという、まるで宝探しのような日常があるのです。

振り返ってみたら私の人生の中に「恵み」が届いていない場所など、どこにもないのです。

もっともっと神の愛を深く知りたいという意欲でさえも「恵みが届いているからこそ思う内容」と考えることができるでしょう。

4) 神の栄光にあずかる希望をもって生きられる

最終的には、神の栄光にあずかる、神の永遠の祝福の中に導きいられるという希望が与えられている。

極論すれば「死をも打ち破るほどのキリストの復活の力、永遠のいのちの輝きの中置かれている自分を意識しながら生きられるようになる」

つまり、歳をとるということが必ずしも、悪いことではなく、神の栄光によくする日が近づいているという喜びでもあります。

年齢的に衰えを感じ、能力も低下し、記憶力も低下している私のようなものでも、今日、精一杯生きることでも神の栄光にあずかる日が近くなったと考えることができることで後悔は少なくなるように思います。

これは究極的な意味での将来への希望です。

イエス様を信頼するということによってもたらされる祝福の大きさ、人生への影響の大きさは言葉にし尽くすことができません。